

平成31年3月4日(月)

### 卒業式の後の空虚感とある文章との出会い

ほんの3日前に、第71回磐城高等学校卒業式が挙行され、314名の卒業生が旅立ちましたが、心の中にぽっかりと開いた空虚な部位が埋まらず、学校のあちらこちらを歩いて卒業生に会えたとしても、とてもさみしい気持ちばかりが先行しています。

こんな時に、次のような文章に出会いました。作家である小椋山博の「表彰ということ」という文章です。ここに、そのまま抜粋させていただきます。

以前、ある雑誌に恵まれない境遇にいる人を紹介する連載記事を書いたときのことである。毎月、福祉施設に5000円のおカネを35年間も送り続けているという女性に会いに行った。8畳一間の木造アパートに住み新聞配達をしている70歳の女性は、僕の取材をかたくなに拒むのをやっとうお願いした。

彼女は、二歳のとき母親が病死、施設にあずけられる。ほかの子にいじめられ、かばってくれる職員のやさしさが身にしみたという。中学を出て働いた紡績工場で20歳のとき工場の男と結婚、7年間に3人の女の子が生まれるが、彼女が30歳のとき夫は結核で死亡、彼女は夫の少額の退職金で、道端でリヤカーを店にしてネクタイを売る。上の子は小学生、あとの二人をリヤカーの横で遊ばせる。

ネクタイは一日に1本ぐらいしか売れなかった。あるとき中年の女性が来て「これタイ焼き、子どもさんに」と差し出され涙がほとぼしした。冬の雪の日、二人の子供が空腹と寒さで泣きわめいているとき初老の紳士がきてネクタイを2本買ってくれる。彼の身なりから、とても彼女が売る安物のネクタイを身につける人とは思えなかったという。彼は一言もしゃべらずつり銭もとらずに去って行った。

間もなく彼女は疲労で倒れ、市役所へ行き医療費の助成を頼んだが規則でカネは出せないと言われた。しかしその職員は自分用の牛乳を一本持たせてくれて、「力不足でごめん」とあやまったそうだ。

彼女は露店をやめて新聞配達をはじめた。高校へ入った上の子が夜は食堂の茶碗洗いのアルバイトをして二人の妹の世話をした。ある日、新聞で親のいない子の施設が経営難と知り、彼女は即座に5000円を送った。名前は伏せた。家族4人の生活は苦しかったが、自分を助けてくれた人々を思うと苦しいなんて言ってもらえなかったという。

35年間の毎月の送金が知れ、市が表彰したいと言ってきたとき彼女はきっぱり辞退した。「私は昔、ある人からタイ焼きをいただいたとき決心したんです。一つの手は自分と家族のために、もう一つの手は人様のために使おうと。私のしたことなんか、大したことはない。表彰するなら私に牛乳をくれた人やネクタイを買ってくれた人を表彰してください。」

彼女の言葉に、僕は絶句して天をあおいだ。

私も絶句して、涙が止まりませんでした。そして、しばらくたった後、もう

一度、この学校に勤め始めたかつての4月1日の原点に立ち戻り、生徒との出会いに心躍らせながら授業の準備を始めた時のことを思い出して、仕事を始めることを決意しました。

また、亡くなった祖母が、人知れず大学生の私に1万円をくれたときのことを思い出しました。不肖の孫は、すぐに都会の生活の中で1万円を使ってしまいました。祖母は、幼い時に自分の目をハサミでついて、右目が見えない98年を送りました。老いてからの内職は、ひとつ50銭ぐらいの内職でした。内職でためた1万円は、すぐに私の胃袋に消えてしまいました。

福島でよく行った焼き鳥屋に来ていた新聞配達を毎朝行っていた一人の女性のことも思い出しました。1ヶ月に一度ほど、孫娘に焼き鳥や餃子を食べさせ、自分はお茶を飲んでいて人でありました。

昔、高校入試に合格した父親の教え子が、うれしくてその母親と自宅に帰る前に私の家に寄ったとき、私の母が5000円渡してその合格を喜んだシーンも思い出しました。その後、その高校生は、私が初めて勤務する学校の高校1年生として私の国語の授業を受け、36年後、私の勤務する学校の隣の学校のPTA会長になって私と再会するのです。

3年生の皆さん。大学生活はこれからです。良い結果を待っていますが、君たちのこれまでの努力は間違いないことなので、結果にとらわれず、ここから始まることをもう一度考えましょう。きっと、長い人生の中で、積み上げていくエピソードは数限りないけれど、よい出会いを繰り返すことがなにより一番のことであると私は思います。

でもね、心から良い知らせを待っている気持ちは変わらないのですがね。私のできることは、毎日、八幡神社で祈り続けることなので、続けていきます。良い知らせが入ったら知らせに来てください。待ってます。来てくれた人には、漏れなく魂のプレゼントを渡します。